

令和4年度 自己評価・学校関係者評価結果 公表シート

学校法人 山縣学園
北山幼稚園

1. 本園の教育目標

モンテッソーリ教育法に基づき、幼児のありのままの姿を認め、受け入れ、個々の発達段階に応じた適切な指導を通して、豊かな個性と確かな判断力を兼ね備えた、個性あふれる人格を育む教育に取り組む。

具体的な教育目標としては、

1. いかなる環境にも適応できる柔軟さと逞しさを培う。
2. 成長する喜びを実感する。
3. 友を思う優しさを身につける。

の3点を掲げ、本園においては学校教育法、及び、幼稚園教育要領に示されている精神に則り、「健康」、「言語」、「人間関係」、「環境」、「表現」の5領域にわたってバランスの取れた独自の教育を行っていくものとする。

2. 本年度に定めた重点的に取り組む事が必要な目標や計画をもとに設定した、学校評価の具体的な目標や計画

●モンテッソーリ教育法に基づく活動を通して、自由と責任の中で自らが考え、選び、自らが成し遂げていく、個性あふれる力を養うことに主眼をおきつつ、以下の内容に取り組むものとする。

○教育内容・教育方針・教育目標を理解し、子供の成長や発達段階に応じた保育・指導計画をたてるとともに、より良い保育の環境づくりに努める。

○教職員同士の協力・連携を深め、園内における情報の共有はもとより、新型コロナウイルスの感染状況を鑑みつつ、オンラインでの参加も含め、研修等への参加を通じて得た知識の共有により、保育の質の向上と保育者としての資質の向上に努める。

○危機管理対策を主眼に置いた、園の安全と衛生管理体制の充実に努める。

○全学年を通じて、より様々な観点から英語活動に力を注ぐとともに、英語に特化したクラスを中心として子供たちの国際感覚を養うことに努める。

○国際感覚を養うにあたり、母国語、原点としての日本語に重点をおき、言葉の表現・文字の美しさを表現する力を養うことに努めるとともに、年長組においては新たな取り組みとしての、個別指導を中心とした正しい姿勢による「ひらがなとすじ」の学習活動により、「知識及び技能の基礎」・「思考力、判断力、表現力等の基礎」・「学びに向かう力、人間性等」によって発達段階に応じて身に付けさせたい力を念頭に、小学校に連携できる、「話す・聞く・読む・書く」についての素地を育成することに努める。

○新型コロナウイルスの感染拡大により、子供達の活動にも制限が掛かることが多くなり、子供達の運動能力の発達面への影響、体力の向上の鈍化を危惧し、子供の個性と段階に応じた運動能力の向上に努め、年中組においては、今までの保育活動における体操とは異なる新たな取り組みとして、「体を動かすことが好きになる」「コロナ禍でも、運動量を落とさずに体力を養う」をねらいとした、「体操プロジェクト」特別サポートプログラムをスタートさせることより、子供達の健やかな体力の向上に努める。

●学年別年間目標

- 年 長：自分の気持ちや考えを表現しながら、様々な活動に主体的に取り組み、意欲的に園生活を送る。
- 年 中：色々な事に意欲的に取り組み、達成感を味わう。
- 年 少：基本的生活習慣を身に付け、幼稚園生活を楽しむ。
- ひよこ：保育者と関わりながら、安定した園生活を過ごす。

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

評価項目	結果	取組状況
① 幼稚園教育要領の精神を踏まえ、園の教育理念・教育方針に従い編成する。	B	<ul style="list-style-type: none"> ○新幼稚園教育要領について全職員で理解に努め、現実的な保育に添わせるよう具体的な場面について話し合い、教育課程の編成にあたっている。 ○昨年度に引き続き、本年度も新型コロナウイルス感染症の感染状況を注視するとともに、社会の情勢や風潮を的確にとらえ、保育体制の変更や、各行事の実施方法の変更等、状況に応じて検討し、縮小・緩和等の変更を行っている。 ○モンテッソーリ教育を実践すべく、子供の気持ちに寄り添い、仕切りの少ない園舎にて、園児が主体となり、活動を展開していける空間と、それに対応する人員の確保と配置に常時心掛けている。また、集団での活動を苦手とする園児に対し、園庭や自然園で自由に活動できる時間と人員を配置する配慮をしている。
② 子供の実態を的確につかみ、理解し、保育のあり方の検討と、具体的な手立てを講じる。	A	<ul style="list-style-type: none"> ○学年会議・職員会議を定期的に行い、毎日の終礼において日々の問題点について検討し、都度調整を加えながら、教育計画・保育計画を実践している。園児1人1人の発達・行動に留意し、各会議にて報告・検討を重ね、全教職員が共通理解の上、子供の実態に合わせた保育活動や時には援助を心掛けている。 ○新しい生活様式における保育者の不慮の欠勤を想定し、常に対応出来る様、学年間の連携を深め、対応可能な保育者の育成と配置を行っている。 ○特に気になる子の行動には注意を払い、共通認識のもと、担当学年の枠を超えて対応に当たる等の配慮をしている。 ○個別の配慮を必要とする園児に対しては、医療機関・療育機関・支援団体と連携し、支援計画を共有する事により、教職員間でも共通理解をした上で、集団内や、時には個別での援助を日々実践している。その上で発達と学びの連続性を保つ為に、自治体や小学校との引き継ぎ等を行っている。
③ 保育者としての能力や良識を確認する。	B	<ul style="list-style-type: none"> ○全教職員が自己評価を実施するとともに勤務ノートの記入の確認を行う事により、各教職員が保育者としての能力や良識を確認し、反省・見直し、改善努力を行っている。 ○適宜、園長・副園長、他、主任格の教諭が学年の枠を超え、様々な保育活動に参加する事により、若手教諭の育成や指導、ベテラン教諭との意見の交換を行い、常に緊張感を持ち、お互いが常に刺激を与えあうことにより、教育者としての資質や能力・良識を高め、保育の質を高める努力を行っている。 ○積極的に若手教諭の研修会等への参加を促し、意識や能力の向上の支援を行っている。

<p>④ 各研修会や研究会に参加し、他職員へ資料提供をする。</p>	<p>B</p>	<p>○昨年同様コロナ禍ではあるが、本年は感染防止に留意しつつオンラインでの参加も含め、コロナ以前よりも少なめではあるが、適材適所の教職員を、新規採用教員研修会・教諭研修会、主任研修会、園長・主幹研修会、保健担当者研修会や経営や政策研修等へ参加させるとともに、子ども発達支援センターや子供用教材開発会社主催等外部での様々な研修へも参加を促し、保育の中での学びを深め、そこで得た研修の成果を他教職員へ共有し、教材研究へと繋げるよう努めた。また園内においては、保育者同士での研修の機会を設けることにより、各保育者が表現力の向上と指導力の研鑽に努めた。</p>
<p>⑤ 安全管理と衛生管理に努め、日々の訓練と予防を行う。</p>	<p>A</p>	<p>○地震・火災の災害を想定し、毎月、全園児・職員参加での避難訓練（本年は出来る限り密を避ける形で）の実施、毎月1日には災害伝言ダイヤルを利用した保護者への緊急時の連絡の訓練を行うとともに、府中市・警察による交通安全教室、消防によるAED講習（職員対象）を毎年行っている。</p> <p>○当園では、以前より重視し取り組んできたことではあるが、各メディアで繰り返し報道された園バスにおける車内置き去り事件を受け、園全体でこの対策について再度協議し、より安全な対策を講じ、一丸となって取り組むことに努めた。また、その上で万が一事故が発生した場合を想定し、集会において園児自らが身を守る指導や練習、また、自動車販売会社（日産プリンス西東京）の協力を得て子供が実際にお尻でクラクションを鳴らすという実習も行った</p> <p>○子供たちの安全を最優先しつつ安全運転を励行し、常時大小8台の園バスを運行していることにより、軽微ではあるがあまり運転等の被害にあう事がないとは言えない実情から、運転業務に携わる者を対象として、府中警察の協力により映像を使つての研修を行った。</p> <p>○遊具の点検を行い、子供たちが安全に遊ぶ環境を常時提供することに努め、その中で残念ながら怪我が発生した際には、目視だけでなく、各所に設けた監視カメラを利用して原因を究明し、次の事故を防止する為の検証を行っている。</p> <p>○年一回、医師による内科検診と、歯科医による歯科検診を実施している。</p> <p>○毎朝各家庭から、携帯アプリを利用して検温報告を受けるとともに、出席確認の際に視診を行い、体調の変化等にいち早く気付けるようにし、変化が見られた時には園長への報告と適切な判断・処置、状況に応じて保護者への連絡を行う等の対応を徹底させている。</p> <p>○子供が登降園する玄関に設置された、非接触による検温機器により登園時の園児と来園者の体温管理を行うとともに、発熱が確認された園児に対しては隔離しての対応等を行っている。</p> <p>○以前より、園児には都度手洗いとうがいの指導を徹底してきたが、コロナ感染症が発生してからは、登園時、園バス利用時、各保育活動の前後、食事前等にはアルコールによる手指消毒を徹底し、園児が手にする、玩具、机、椅子、ドア、トイレ等をはじめ、床面等にも消毒作業を行っている。</p> <p>○園バスにおいては最大8台（事務車両を含めると9台）が運行されているが、園児の乗車前と乗車後の車内消毒作業、及び、乗降時の園児の手指の消毒、運行時の換気を、徹底して行っている。</p> <p>○コロナ感染症拡大予防の為、窓や扉は大きく開けて換気を行い、冷暖房時にも1時間毎に10分程度換気を行っている。</p> <p>○熱中症対策・感染症対策として、園児にこまめな給水の声掛けと指導を行っている。</p> <p>○感染予防を目的として、昼食時の密を避ける為に、食事は時間差で交代して摂ることとした。また、教職員は、園児の食事中は食事指導に努め、一緒に食事をとることは避け、交代で離れて摂ることとした。</p>

<p>⑥ 保護者への適切な対応と、家庭との連携、及び、地域社会との連携を図る。</p>	<p>B</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○全園児保護者に携帯アプリの幼稚園向けICT支援システム「コドモン」への加入を促し、保護者からの連絡、園からのお知らせ、出欠の連絡と登降園管理他、様々な事についてアプリを利用する事により、相互が情報を共有している。 ○毎月、園だより(学年別)を携帯アプリ「コドモン」にて配信、及び、ホームページに掲載し、園での生活風景の写真についてもアプリ上で保護者がスマホで閲覧出来るようにする等、コロナによる自粛登園をきっかけとして、従来のプリント等、紙ベースの配布物で行われていた連絡やアンケートなどについても電子化して、急な欠席や在宅時にも様々な連絡を相互に受け取れるシステムの構築をアプリを活用して行っている。 ○コロナ感染症拡大により、従来は学年ごとに行なってきた個人面談については、希望者のみを対象として期間を定めて実施してきたが、状況に応じて臨機対応が必要とされるケースはその都度行うというスタンスは変更せず、特に対面を希望・必要とされる場合においては感染状況を見ながら、適切な換気と仕切りの利用や距離を取っての面談を実施した。 ○この2年間コロナ禍以前のスタイルでの実施が困難となっていた参観・行事ではあるが、各行事の内容や時間を再検討し、学年単位ではなく、クラスやグループ単位での行事に変更し、親子で参加できる行事や、保護者の参観を可能とした。また、市中での感染状況によっては、以前のスタイルでの実施や、参観の種類を新たに増やすことにより、保護者が日常の保育を知る事の出来る場の提供にも努めた。 ○行事や参観後、学期ごと等、節目節目で保護者にアンケートをお願いする事で、保護者の率直な思いや意見を知ることが出来た。 ○教育実習生の受け入れや、地域の学生の職場体験やインターンシップ等については、状況を見ながら可能な限り協力し実施した。
<p>⑦ 積極的に英語教育を取り入れ、国際感覚を養う。</p>	<p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○少人数で行う英語に特化したラビットクラスは年少から年長まで各学年で多くの子供が参加し、それぞれの年齢、経験に沿った学習内容・速度でネイティブの講師により英語での日々のコミュニケーションを強化、環境づくりに努め、信頼関係を深め、臆することなく外国人と自然に交流出来る力を育むことが出来た。 ○通常クラスにおいても、専門的に英語教育を受けた日本人講師や、預かり保育時の選択次第ではネイティブの外国人講師による、数多くの幼児英語教育プログラムの活動時間において、無理なくリズムのある英語を耳で楽しめる様に、自然と受け入れられる楽しい環境づくりにつとめた。また、昨年より年長クラスにおいて、絵本『はらぺこあおむし』を題材に取り上げ、お絵描きを楽しみながら色彩感覚を養いつつ、リズムと振り付けを加え、発表会で絵本を英語劇風にお披露目することを目指した正課授業を展開することで、より英語を身近に感じ、親しんで学習出来るよう努めた。
<p>⑧ 日本語の言葉の表現・文字の美しさに改めて気づかせるとともに、就学に向け学習へとつなげていく。</p>	<p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○英語教育に目が向きがちな昨今、今まで学年ごとに各保育者によってカードやワークブックを利用して日本語のかなの読み書きの学習を進めてきた日本語の文字学習に昨年度より再び光を当て、年長クラスにおいては専任の講師を迎え、就学を見据えた新たな目線での文字学習に努めてきたが、本年は更に新たな講師を迎え、個別指導を中心とした「ひらがなとすうじ」の学習活動により、個々の発達段階に応じた読み書きを中心としながらも、小学校に向けた「話す・聞く・読む・書く」についての素地を育成することに努めた。 ○年長組においては昨年度同様、講師と保育者の指導の下、半数以上の園児が全国書写書道伝統文化大会 令和4年度全国年賀はがきコンクールにチャレンジし、今年も好成績を収めることが出来た。 ○全学年を対象に、登園時に上履きに履き替えたらず、自分の名前をひら

		がなで正しく書く(または字をなぞる)練習を行えるスペースにて記名をしたのち、各学年の保育活動の場へ参加出来るよう、職員を登園時間帯は複数名配置しその声掛けにも配慮した。
⑨ 子供の個性と段階に応じた運動能力の向上に努め、子供達の健やかな体力の向上に努める。	A	<p>○コロナ禍において、子供達の遊びや運動はその活動内容やスタイルにおいて少なからず影響を受け、とりわけ家庭での活動においては人との接触を避け、内側に籠ることも多くなり、気が付くと運動量の減少により運動能力の低下、体力の低下へと繋がり、場合によっては運動が嫌い、苦手に思う子供が増えることも予想されることから、園では体操教室の講師と連携しそれぞれの学年に適した運動の指導にあたることに、定期的に子供の個性と段階に応じた運動指導の研修を行うことにより保育者側のスキルアップを図り、外遊びの時間にも活用することにより、子供達の運動能力の向上に努めた。</p> <p>○年中クラスにおいては今までの保育活動における体操とは差別化を図り、新たな取り組みとして、「体を動かすことが好きになるように」「コロナ禍でも、運動量を落とさずに体力を養える」をねらいとした、「体操プロジェクト」特別サポートプログラムをスタートさせることより、子供達の健やかな体力の向上に努めた。この取り組みは本園の正課授業・課外授業を行う「コスモスポーツクラブ」指導員により、正課授業の中で、「なわとび・ブリッジ」を主なメニューとして行われた。なわとびにおいては、体操の授業以外の遊びの時間や、保育活動の中でも子供たちが楽しく自主性をもって取り組めるよう導入に工夫をし、技や回数を切磋琢磨し励んでいる姿がよく見られた。また、ブリッジは元々年長になると運動会で披露する演目の中に伝統的に取り入れられているもので、子供達はあこがれを持って取り組むことが出来、保育者は安全面の配慮に留意しその指導に努めた。</p>
⑩ 各学年が目標に向け、向上心を持ち、子供達の成長に寄り添って進んでいく。	A	<p>○本年度もコロナ感染症の拡大と感染拡大を抑える為の自粛登園をやむなくお願いする事が度々あった。自粛時や自粛後の出席園児数の割合は以前と比べ格段に多くはなかったが、各保育活動や行事への取り組みに関しては多少なりとも制限をせざる負えなく、コロナ禍以前の園生活を送る事はなかなか難しい状況が続いた。しかし、その中であっても、環境づくりや保育方法・内容を検討・工夫をする事により、園児と保育者の信頼関係を回復・築くことは出来ていた。また、教職員一同が日々各々の目標や、子供達の成果発表の場に向け、互いが様々な議論を重ね、研鑽を磨く姿も見られた。</p> <p>○年度末が近づくとつれ、感染者数が次第に減少へと転じてはいるが、完全に元の状況へ舵を切ることは難しく、模索しながらではあるが、次のステップへと進むべく教職員が協力し、より良い方向へと邁進するべく努めた。</p>

4. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

結果	理由
B	<p>コロナ感染者数はいくつもの波となり引いては押し寄せ少なからず本園においても昨年度以上の感染者が園児及び保育者からも出るという事態となった。園の対応としては、その都度登園の自粛や観察期間への協力を呼び掛け、感染拡大防止に努めたが、この繰り返しの中、状況に慣れてしまう事が危惧され、実際に自粛期間においても大部分の園児が登園し、中にはどのような状況、環境においても、ノーマスクを主張する家庭が有ったり、発熱がみられる園児が登園してくる事も有った。また、体調のすぐれない園児の対応で保育者が感染の危険を伴うことも有ったりと、今後政府の主導により、コロナへの対応が益々緩和されていく中で、幼稚園という大勢の園児の命を預かり守る場としては、ここ</p>

で、コロナに限らず感染症対策としての対応を職員一同が共通認識として徹底し、取り組むべき課題となった。

このような状況ではあるが、年間行事については、コロナ以前の内容・構成と同じとは言えないが、保育者同士が協力・連携し、工夫を凝らし修正や変更を加えながら新たな形を取り入れる事により九割以上の者が実施に至ることが出来た。そして、実際に子供を指導する立場に若手の保育者が増えてきたことにより、ダンスの振り付け等にも新たな手法やセンスが加わり、プラスの方向へと化学変化が見られ、保育者の思いが子供達に伝わり、その成果を発表することが出来た。

保育・指導計画においては、昨年同様、その時の状況に応じ、変化や変更を求められることとなり、関係する教職員が連携し、その都度先送りすることなくディスカッションを重ね、対応することが出来た。また、同様に教職員の大多数が参加し、翌月やそれ以降の保育活動・教育活動に関する事を協議する場所であった職員会議については参加人数が多く密になりがちであった為、その開催回数を減らす事とし、その会議に至るまでの過程において、常に活動を共にする保育者グループ、またそれをサポートしていく保育助手・職員間での少人数でのグループ会議に比重を置き、ICTを活用することにより、情報の共有に努めながら、同時に保育者間での感染症対策にも考慮しながら、教育課程の編成・教育活動を今年度も滞ることなく進めることが出来た。また、保護者及び保育者間においてもICTの活用により、広く情報が共有出来る様になった。その反面、昨年より問題視されていた案件ではあるが、専門性・独自性のある情報においては、各々の教職員のモチベーションや意識の違いにより、理解度の差が顕著となった為、以前の様な紙媒体での情報の周知や、実際に異なる部署の職員が集まり多方面の意見交換を行う場としての職員会議の頻度の検討が必要と思われる。

上記のような状況とコロナ禍の中、本園の職員の構成上、子育て世代が多い為、職員本人の病休ではなく、その子供が学級閉鎖や濃厚接触者となり、やむを得ず欠勤せざる負えない事態が多くあった一年であった。そのたびに当日出勤している保育者が担当学年の枠を超え、献身的に保育活動にあたることによって厳しい状況を乗り切ることが出来た。

このような状況の中ではあるが、①個々の発達段階に応じた読み書きを中心としながらも、小学校に向けた「話す・聞く・読む・書く」についての素地を育成することに努めた、個別指導を中心とした「ひらがなとすじ」の学習活動への取り組みや、②「なわとび・ブリッジ」を主なメニューとし「体を動かすことが好きになるように」「コロナ禍でも、運動量を落とさずに体力を養える」をねらいとし、子供達の健やかな体力の向上に努めた「体操プロジェクト」特別サポートプログラムによる取り組み、等により、当園の教育活動・教育水準の向上に努めた。

これらの事より、世の中がコロナ禍となり3年が経過し、いよいよこれから様々な規制も緩和され新しい生活様式を取り入れての幼児教育のリスタートに先立ち、保育活動・教育活動の多面性をとらえ、園全体、全職員で支え・対応してきた1年間であったのではないかと、そして、ゴールはまだまだ不透明で先が見えない世の中ではあるが、子供達の明るい未来に向け、その可能性を広げる手助けとして、幼児教育を提供できたのではないかと考える。

◎ 「3.4.」の評価結果の表示方法

A	十分達成されている
B	達成されている
C	取り組まれているが、成果が十分ではない
D	取り組みが不十分である

5. 今後取り組むべき課題(継続、及び、新規)

課題	具体的な取り組み方法
① より良い指導計画の編成	<p>現在、本園に在籍している園児の実態を実際に観察、精査したうえで、子供を取り巻く家庭環境等も踏まえ、前年度保育を担当していた保育者の意見を反映した形で、新教育要領に基づいた指導計画の作成の為に訂正、加筆をさらに加え、現在のコロナ禍、また、コロナ後における保育の在り方や行事の内容や編成等も考慮し、本園が抱える環境や問題点についても職員全体で話し合いを重ね、その実態に即した新たな指導計画の編成に一丸となって取り組んでいく。</p>
② 自己点検・自己評価と教職員の資質向上	<p>自己評価における課題について、教職員一人一人がより突き詰めて考察をすすめ、自己研鑽に努めていくとともに、本園の教職員としての自覚と意識を常に持ち、責任ある言動に心掛け、子供の成長に寄り添い、幼稚園教育要領の改訂を意識しつつ、子供の主体性や学びを大切に、より専門性を高めるべく、可能な限り研修等にも積極的に参加し努力する事で、幼稚園教諭・保育者としての資質や能力・適性を高め、知識・意識・技術の向上に努めていく。</p>
③ 危機管理対策の徹底	<p>現在のコロナ禍における衛生対策については、昨年に引き続き、本園の非常勤の看護師、園医・保健所との連携、及び、指導の下、現状の対策をより確実なものへとステップアップを進めるとともに、防犯に対しては警察署主導の下の訓練を通し、各職員が常に意識を忘れず対応していくものとする。</p> <p>防火防災に関しては、月一回、残念ながら現在漫然と行われている訓練を、防火防災管理者及び訓練担当者を中心とし、新たに消防計画を作成し直し、その月ごとのねらいを定め、非常時における全職員の役割分担を明確にし、訓練においてはそれに則って行動し、意味のある訓練へと修正していくものとする。また、その結果を職員全体で考察・検討し、翌月の訓練につなげていくものとする。</p> <p>送迎バスの運行においては、交通ルールに則り、園児の安全に細心の注意をはらうものとし、置き去り対策として二重三重のチェックと第三者のチェックを必ず行うものとし、今年度再構築したものを常に検証しながらステップアップしていくものとする。事故に対してはその大きさや程度に関わらず、警察署(怪我人がいる場合は消防にも)、及び、園長・関係部署への連絡を必ずするものとする。</p> <p>園内における事故・ケガに対しては、園長(副園長)・担任への報告・保護者への連絡・医療機関等への連絡と対応を行うとともに必ず記録を残すものとし、その後のフォロー対応までの流れをマニュアルに従って行い、そのマニュアルについては全職員が共有し実行できるものとする。</p> <p>危機管理に対してはすべての対応をマニュアル化する事とし、全職員が対応出来る様、日々の訓練を実施し、安全に対する意識の向上に努める。</p>
④ 預かり保育における縦割り保育の更なる充実と職員の連携	<p>通常保育後に引き続き行われている午後の預かり保育時間は、親迎いの園児とバス利用園児(バス出発時間により2グループに分割)に別れて過ごす事となるが、縦割りでの保育を基本とし、本来であれば、預かり時間専任の保育者が担当する事が好ましいところであるが、現状ではほとんどの時間を通常保育の教職員が交代で担当しているというのが実情である。通常保育職員の負担軽減と、教材研究の時間の拡充の為に、専任保育者の補充が急務であると考えられるが、このポジションの雇用状況は厳しく、常に入れ替わりが絶えず、実現には至らないのが現実である。また、縦割り保育には上の子が下の子のお世話をする等の良い所もあるが、どうしても体格の差による怪我等の危険が伴うため、保育者は常に観察を必要とするとともに、保育内容や手法に工夫をする等の準備に努めるものとする。</p> <p>また、通常保育の担当者と預かり時間を担当する保育者は、常に情報交換などを密に行い、園児の安全を第一に、連携を意識して進めていくものとする。</p> <p>万が一の怪我等があった際には、担任への報告と園長への報告を必ず行い、危機管理対策にあるように、マニュアルに従って対応・行動するものとする。</p>

<p>⑤ 保護者との連携と満足度の把握</p>	<p>一昨年度、携帯アプリの幼稚園向けICT支援システム「コドモン」を導入する事により、電話とホームページ以外のほとんどの情報共有がアプリでのやり取りで可能となった。今まで紙での文書やアンケートというもので電子化しアプリ上でのやり取りで行うことが出来る様になり、保護者との情報の連携は以前よりもスマートに行なえるようになった。担当事務職員においてはそのスキルを向上させ、様々な機能を理解している。その反面、保育に携わる保育者等においてはなかなか使いこなすというレベルには至らず、全職員への知識の共有と、教職員が自ら教育を受け・研修等によってスキルの習得に努めていく事が、新しい生活様式の中では前年度と同様に今後も必要と思われる。</p> <p>またアナログからデジタルへの変換は提供する側だけではなく、授与される側にもある程度の理解が必要となる為、如何に保護者側の意識を高め、働きかけを行っていけるかという事が引き続き課題のひとつとして挙げられる。ただ、保護者への対応はこの技術のみに頼るのではなく、多様性をもって、アナログな努力によって成り立つものもあるという事を忘れずに、接していく必要が大切と考えられる。</p>
<p>⑥ 新たな取り組みの継続とその向上</p>	<p>教育活動として今年度新たに取り組んだ、前年度の取り組みを踏まえた上での個別指導による文字指導、及び、体操プロジェクトにおいてはある程度の成果を収め、教育の質の向上につながったと判断が出来、保護者からの好意的な感想や意見を賜うことも出来た。これにより、来年度は今年度の反省を踏まえ、よりステップアップしたレベルを維持しながら、講師と保育者が協力して継続していくものとする。今年度は外部講師を起用しての取り組みであったが、今後、当園の保育者による指導へと転換していくことも視野に入れ、保育者は常に自らも学習しながら教育活動を進めていくものとする。その中で生じた問題点などについては保育者同士による情報共有を行い、切磋琢磨し、自己研鑽に努めていくものとする。</p>

6. 学校関係者の意見・評価

<p>本年の評議会の構成について、官公庁よりの新型コロナウイルス感染対策の緩和を受け、評議会の人数を増やし、本園外部理事、カンガルークラブ（保護者およびOB）、近隣住民様のご協力により編成させていただき、本園自己評価・学校関係者評価担当 小野 の立ち合いの下、開催させていただきました。（内容については、別紙、『令和4年度学校関係者評価 結果報告書』を参照ください。）</p> <p>●保育時や発表会における換気方法、園児のマスク着用、園庭での自由遊び時の保育者の配置、保育者の退職などに置いて意見交換がなされた点以外においては、<u>この自己評価結果公表シートにおいて、特に特筆すべき事項はなく、妥当であると認められる。</u></p> <p>以下、下記のような意見等も寄せられ、今後の検討事項の中に織り込んで考えていきたいと思えます。</p> <p>○教職員は、子供の安全を第一とし、主体的に活動できる場を、いつでも提供できるよう、日々努めていくものとする。</p> <p>○コロナ禍における行事や参観の開催について、保護者からは感謝の言葉と、保護者の中に無断でノーマスクの方が居たが如何なものか、ルール違反ではないのか、毅然とした対応をとってほしい、というような意見が寄せられ、観覧人数に対しては、1名というのは少ない、今後は増やしてほしい。という意見が多く寄せられた。また、換気についてそこまで開けなくても大丈夫では？冬は寒すぎるし、夏は虫が心配という意見もあった。</p> <p>○保護者の意向とはいえ、感染者数が多いときに園バスの中でマスクをまったくしていない子がいるというのはいかがなものかという意見も寄せられた。</p> <p>○教員であろうと、バスの運転手であろうと、事務員であろうと、園児から見れば同じように先生なのであるという事を</p>
--

意識して、行動や言動に注意し、常に子どもと共にいて欲しい。バスの助手で言葉遣いが荒い人がいるけど大丈夫なのか。という意見や、園庭で多くの子供が遊んでいるが、小さい子もいて危なくないのか。先生の数も適正に配置されているのか。大人同士で会話されているが先生がいます。スマホばかり見ている先生がいる。という意見が寄せられた。子供の声は幼稚園だからしょうがないと思いますが先生の声がうるさく感じる事が有る。行事でもないのにマイクを通してしゃべっている声うるさく感じます。という意見があった。

○夕方、親の送迎の車が集中して、引き渡しに手間取ることがあるように見受けられる。ルールを守っていない送迎の車が見られる。玄関に職員の姿が見られない時がある。という様な意見が寄せられ、本園としてもその在り方について再検討が必要と思われる。

○園バスの運行において、当園においては対策を常にバージョンアップをしているが、保護者より置き去り対策の徹底をお願いしたいという意見も寄せられているので、更なる検討をしていくものとする。

○退職する先生がいるのはしょうがないことですが、それについてのお知らせしてほしい。子供を見ている先生がわからない。という意見が寄せられた。

○報道の中で保育園の保育士による体罰というのが話題となる事が有り、不安に思われる保護者も当然いる事から、本園においてそのような事が起こらない様、職員一同気を引き締め、互いに注意をしつつ取り組んでいくものとする。

○隣接している住宅へ子供がおもちゃやボールを蹴りこんでしまう事が有ると思いますが、その対策は?という意見があったが、ゼロにすることは難しい為、子どもたちに注意喚起をするとともに、起きてしまった際にはすぐに対応することを職員が徹底していくものとする。

7.財務状況

公認会計士監査により、適正に運営されていると認められている。